



## 令和6年行方市二十歳のつどいはたち



▲市長から記念品贈呈 代表 椎名 琴美さん



▲代表謝辞 実行委員長 石井 悠斗さん



▲司会進行も円滑に行うことができました



▲アトラクションの準備も実行委員が行いました

**1**月7日（日）、行方市文化会館にて、令和6年行方市二十歳のつどいが開催されました。

今年二十歳を迎える人は、平成15年4月2日から平成16年4月1日までに生まれた、市内在住者および市立中学校卒業生303人です。

会場は、晴れ着に身を包んだ若者たちが、久しぶりに会う友人と写真を撮ったり、近況を語り合ったりと、たくさん笑顔であふれました。

二十歳のつどいの企画・進行は、二十歳を迎える人たちが構成する実行委員が中心となって行いました。さらに、社会貢献活動の募金の呼びかけなどをしながら、それに応じた一人一人の協力により、二十歳の門出にふさわしいつどいになりました。

式典の中で、市長からは「二十歳という年代は、心も体も活力に満ちあふれ、人生で一番輝いている時期です。この若さは皆さんにとって大きな強みとなります。ぜひ皆さんには、多くの人からさま



## 二十歳のつどい 実行委員紹介

石井 悠斗	石間 雄樹
渡邊 美友	河野 騎士
成田 彩華	河野 美咲
出沼 由衣	石井 初叶
金田 央翔	磯山 汰実
切島 琉太	近藤 夏碧
椎名 琴美	篠原 碧里
安部 瑠花	



さまざまなことを学び、自分自身の裾野を広げつつ、新しい社会を築いていってほしいと思います」と励ましの言葉がありました。

式典後のアトラクションでは、中学校時代の学年主任の先生方、担任の先生方からお祝いの言葉をいただきました。また、参加者有志による祭りばやしと踊りの披露をしていただきました。

新たな未来に向けて羽ばたく二十歳の皆さんの、今後のご活躍を期待しています。

# 祝！二十歳



**社会貢献活動**  
**【いばらき子ども食堂応援募金】**  
 二十歳のつどい当日、会場にて、実行委員、高校生会が中心となって募金活動を行い「33170円」の募金が集まりました。皆さんからいただいた募金は、認定NPO法人茨城NPOセンター・コモンズを通じて、サポートを必要とする県内の子ども食堂などに助成され、地域で子どもを支え、見守る仕組みの創設や継続のために活用されます。



◀▲ 祭りばやしのキツネ、おかめの舞、ひよつこの踊りが演奏と共に披露されました。恩師の先生方からは、思い出などを語っていただきました。

**アトラクション**  
**【中学時代の先生からのお祝いメッセージ】**  
**【有志による祭りばやしの演奏と踊りの披露】**



磯山 叶汰さん

この二十年間、私たちはたくさんの人に支えられながら、成長してきました。二十歳という人生の節目、大人としての門出を迎えることができたのは、どんなときも一番の味方でいてくれた家族をはじめ、辛いことも楽しいことも共有し、互いに高めあってきた友人、ご指導いただいた恩師の皆さまや、いつも優しい笑顔で見守ってくれた地域の皆さまのおかげです。

私は、社会人として働いています。ビールのアルミ缶を製造している会社で、ネットワークの管理等を行う仕事を担っています。働き始めて、二年の月日がたちますが、いろいろな壁にぶつかってきました。例えば、人間関係についてです。誰でも一回はぶつかったことがある壁だと思います。学生の頃は、接していて「合わない」と感じた相手とはすぐに距離をおくことができましたが、社会人では、そうはいきません。周囲に

同年代が多かった学生時代とは違い、幅広い年代の方と関わりを持つことがほとんどです。感じ方や捉え方が人それぞれで、自分の考えを人に伝えるということの難しさを痛感しました。このようなとき、気軽に相談できたのは、友人や家族でした。友人とは同じ悩みを分かち合い、家族は何も言わずに私の話を聞いてくれました。今でも、人間関係は難しいと感じていますが、周りの人たちからのアドバイスに耳を傾けつつ、不器用でも自分のペースで解決方法を探していくことの大切さを学びました。

今後、このような壁にぶつかることが多々あると思います。うまくいくことばかりではないと思いますが、そのようなときでも「楽しんでこそが人生」と思いながら、強く生きていきたいと思えます。私が前向きに考えることができるのも、いつも支えてくれる友人や家族がいるからです。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えさせていただきます。「いつもありがとう、そして、これからもよろしくお願いします。」この式典が終わった後や、家に帰った後に皆さんも家族に感謝の気持ちを伝えてみてはいかがでしょう。私は「人とのつながりを大事にしていきたい」と、二十年間生きてきて思いました。恥ずかしくても、不器用でも、これからも感謝の気持ちを伝えていけるようにしていきたいと思えます。



河野 美咲さん

私は現在、短期大学で保育者になるための勉強をしています。今年の三月には卒業し、社会人として、一人の先生として働き始めます。これまでの二十年間を振り返り、思ったことは、この世界に「当たり前はない」ということです。私は、高校生の時に事故に遭い、左足に後遺症が残りました。膝を曲げることができず、しゃがんだり走ったりと人間が当たり前に行えることができず、足元を切断しない選択をしたため、手術やリハビリは過酷で、立ち方や歩き方も分からず、ずっと寝たきりの状態でした。食事もうろくにできず、トイレにもお風呂にも行けないという毎日でした。それでも、保育者になるという夢は諦めきれず、保育の学校に進学しました。しかし、現実には甘くはなく、実習は地獄の日々でした。子どもたちと一緒に駆け回り遊ぶことができず、子どもの目線に合わせることができない。こんな私

が、子どもたちの大切な時期に関わっていいのか、保育者になっていいのか、毎日葛藤しました。私の後遺症への理解は難しく、生きづらさを感じていました。

社会では、子どもの虐待に関するニュースが連日のように報道されています。また、戸籍の登録がなく、この世に存在していないとされる子どもたちもいます。自分の経験と、こうした社会の現状からも、今、自分が生きていることは「当たり前じゃない」ということを強く思い知らされました。この世の中は、誰かの支えがあって成り立っています。

私は、小さいながらも、一生懸命に生きている子どもたちがいることを知り、家に居場所がないと感じる子どもたちも、愛されていると安心して過ごせる環境をつくれる、私自身がその居場所になれる保育者になりたいと考えています。保育者は、子どもたちにとって、家族以外で生まれて初めて関わる大人の一人です。ハンデを持つ私だからこそ、私にしかできない保育をしていきたいと考えています。そして今、私自身が生きていて良かったと思えるのは、家族をはじめ、友人や周りの方々のおかげです。これからも、行動や言葉で、感謝の気持ちを伝え続け、思いやりを忘れることなく、支えてくれる人々を大切にしながら生きていきたいと思えます。